

March, 1992

神奈川県新記録のヤイロチョウ *Pitta nympha* 標本について

田代道彌・磯崎三好

(箱根強羅公園・神奈川県箱根自然公園管理事務所)

The First Record of Fairy Pitta, *Pitta nympha*, from Hakone-machi, Kanagawa Prefecture

Michiya TASHIRO and Miyoshi ISOZAKI

A dead Fairy Pitta, *Pitta nympha*, was recorded from Hakone-machi, Kanagawa Prefecture on 29th June, 1991. It is the first record of the species from Kanagawa Prefecture.

ヤイロチョウ *Pitta nympha* 成鳥1羽が、神奈川県箱根町で拾得された。神奈川県内では本種の渡来例として最初の記録になるので、この標本の各部測定値を添えて報告する。この標本は1991年12月、神奈川県立博物館に移管された。報告にあたり、ヤイロチョウに関する文献の閲覧について便宜を与えられた神奈川県立博物館中村一恵氏のご好意に、心より御礼を申しあげる。

標 本 デ ー タ

拾 得 地：神奈川県箱根町仙石原1244. 810m. alt., 鈴木正章氏拾得。

拾 得 月 日；29, VI, 1991.

測定値(mm)；嘴峰 27, 翼長 130, 跗蹠 42, 尾長 43, 体長 197, 翼開張 429.

本標本の写真を図1に示す。

1. 日本産ヤイロチョウの測定値について

清棲(1965)による日本産ヤイロチョウの翼長は117~127mmである。今回拾得された箱根産のヤイロチョウは、上記の測定値に見られるように大形の個体で、これまで知られている本種の標本の中では最大の位置を占めるものと思われる。日本産のヤイロチョウは中国・台湾・ベトナムなどの標本にくらべると大形で、これを最初に指摘したのは黒田長久氏であった。氏によれば台湾産の翼長117~122mm, これに対して済州島産は125~126.5mm, 日本産は125mmで多少大形である。以上、清棲(1965)による。

済州島産のものは、地理的にも九州・四国と同一の群と認められる。そしてさらに台湾産のものは、中国本土と海南島の標本も合せて同じ系統に属するらしく、台湾産だけが小形ということではない。従ってこれらはまとめて仮りに中国産と呼ぶことにする。つぎにこれまでに知られたあまり多くないヤイロチョウの各部測定値を比較すると、日本産と中国産との間には、

各部の大きさを別にすれば系統を相違させるような差は表現されていない。

たとえば中国産の標本の測定値 $N=7\text{♂♂}$, $N=6\text{♀♀}$ (Baolai et. al., 1985) と、日本産の 4♂♂ について、嘴峰・翼長・跗蹠・尾長などの各部の測定値をそれぞれに較べても、いずれの場合にも日本産と中国産とは同じクラインの上に位置するらしく、中国産は小形で日本産は大形でありながら、その中間では連絡し合っている。つまり測定値からは、日本産と中国産とは同種内で系統を相違させるような傾向は見られないようである。

ただ今後さらに多数の標本によって、細部の比較を進める必要はあると思われる。たとえば嘴峰と左右口角間の幅、跗蹠と指長の対比などに検討が残されている。そしてその理由は、日本や済州島産のものは、中国産のものに対して渡りのルートと距離が相違し、それは繁殖地と越冬地など地域差の存在を推定させ、これらは種内の系統的な相違を表現する疑いが捨てきれないからである。体の各部の測定上の格差も、その表現のひとつと認められる。そしてこのような状況の中で、箱根産の標本は最大の位置を占めている。

2. 神奈川県周辺のヤイロチョウ情報

箱根仙石原の標本の拾得地は、箱根火山の最高峰神山のナダレ堆積層によって形成される西向きの台地上に位置し、南方800mの距離で芦ノ湖(724.5m. alt.)の北岸に達する。一帯は古くから採草地であったが、現在では50年生の針葉樹の植林地帯となり、その中に分譲地計画によるホテル・保養所などの建物が散在している。

この標本はホテル箱根パウエルの窓ガラスに衝突して死んでいたもので、拾得者鈴木正章氏によれば当日早朝衝突したらしいと云う。筆者の一人田代が剥皮した時の所見でも、夏季というのにいたみはほとんどなかった。

しかし、拾得地の現在の環境からは、この地域がヤイロチョウの生息地とは考えにくい。ところがここより東方へ約800mほどの距離からは姥子・神山・台岳に続く温帯性落葉高木林が展開し、上部ではブナ、下部ではミズナラ・コナラなどが優占するので、ヤイロチョウが依存するのに適した環境と認められる。しかしこれまで、この地域はもとより箱根山地のどこからもヤイロチョウの観察例はなかった。

日本のヤイロチョウは、はじめ四国・九州で繁殖し、本州には迷行するような印象があった。しかし、その後本州からも繁殖確認例が増加した。そして現在本州における分布地として、秋田・栃木・長野(B.)・山梨・静岡(B.)・愛知・福井(B.?)・三重(B.)・和歌山・鳥取・島根・広島(の諸県が知られている(Brazil, 1991))。その中で神奈川県に隣接する山梨・静岡(B.)の両県から記録があることは注目されよう。

1991年初夏、日本野鳥の会神奈川支部では、神奈川県の丹沢山地で本種の鳴声が聞かれたとの情報を得て、調査したがついに確認に到らなかったという。同じ頃箱根でこのような拾得例があり、さらに上記のように近隣諸県からの記録を併せると、ヤイロチョウは個体数は稀ながらも、関東西部山岳地帯にも毎年渡来している可能性が濃いと云うべきであろう。そして特に神奈川県の箱根や丹沢の山地では、再発見が期待される鳥類の1種となった。

ま と め

日本産のこれまで知られているヤイロチョウ *Pitta nympha* の測定値の中で、今回の神奈川県産標本の測定値は最大の位置にある。もともと中国産(台湾・海南島などを含む)の本種にくらべて、日本産のものは大形になる傾向があるが、これまでに報告された測定値の限りでは、中

国産と日本産とでは同じクライン上にあつて、二つの産地のものは中間で連絡している。しかし2地域の本種は繁殖地・越冬地・渡りのルートなどを相違させ、その差が体の大きさに表現されているのであろう。従つて今後さらに多くの標本によつて、体の細部の比較検討が必要と思われる。

ヤイロチョウは神奈川県内ではこれが最初の記録だが、また神奈川県に隣接する山梨・静岡(B.)の両県からもすでに記録されていることから、神奈川県を含む関東西部山岳地帯に、本種は稀な個体数ながら、毎年渡来している可能性が強くなつたと思われる。

引用文献

- 清棲幸保, 1965. ヤイロチョウ, 改訂日本鳥類大図鑑 I, 383. 講談社, 東京.
BAOLAI, Z. *et. al.*, 1985, FAUNA SINICA, AVES, 8, 45-46, Science Press, Peking.
BRAZIL, M. A. 1991, The Birds of Japan, 195. Christopher Helm, London.

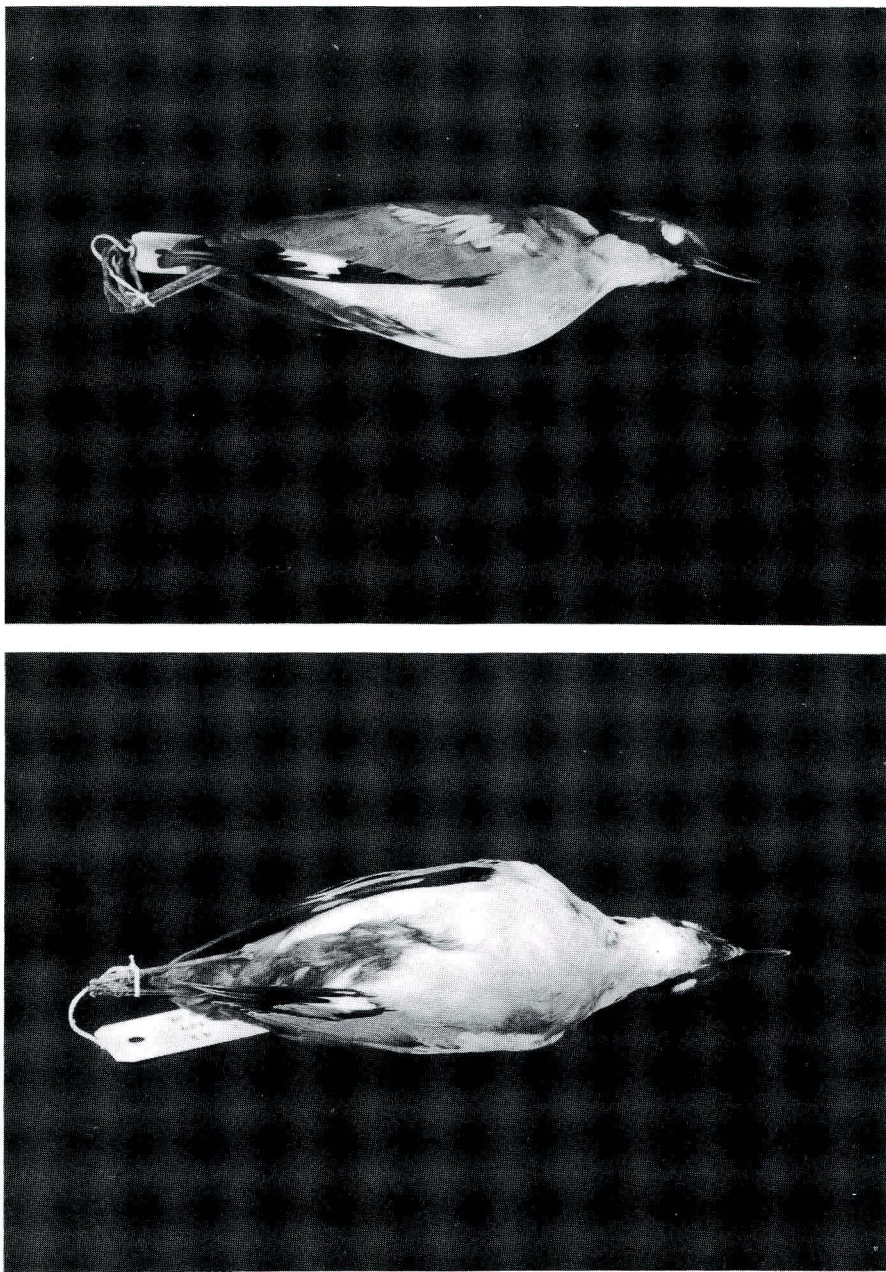


図1 ヤイロチョウ *Pitta nympha* ♂成鳥，箱根産．側面（上），下面（下）